現状であるという。いずれにしても、学校五日制や生涯学習などの要請に応えるために社会教育体制の現状はあまりにも容量が不足し過ぎている。指導者の養成、職員の増員、公民館や体育施設・図書館等の条件整備は急務である。と同時に、学校施設の開放、学校教職員と地域住民、父母、社会教育関係職員との連携の体制をそれぞれの地域で追求することが強く求められる。また、地域別または目的別の青少年活動を活性化するための団体・サークルの育成や、幼稚園・小学校低学年・養護学校などの子どもの遊びやスポーツ・文化活動を休日に実施する必要性も強調されているし、親と子、子どもとお年寄りなど世代を越えた形の文化的活動が地域連帯の中で工夫されることが大切だとの指摘もある。社会教育体制の改革充実は、学校教育より幅の広い、人もお金もかかる課題であるといえる。

「文明の核心は弱いものや未來を守ることにある。子どもは環境と同じように弱く、しかもそれ自体が未來なのである」（ユニセフ「世界子供白書」一九九〇年）。

（やの　きょう＝新潟大学教養部）

［表紙のことば］

理科クラブ

那須高明

旧制中学入学という年齢の教員も少なくなった。同僚のなかでも化石教員扱いされる。四十年も前のことをきのうのことのように話すものだから、よく笑われる。

生徒の使っている教科書にぱらぱらと目を通して、私の頃とずいぶん違うと感ずるのは理科、特に生物はほとんど解らない。

小学生一〇五人にきいてみました

学校五日制	
さんせい	94人
はんたい	11人

◇

さんせい

友だちとあそびたい（大ぜいでSけんなど）。／ならいごとに行っている。／いいけど月一回くらいがいい。／ねぼうになるかもしれない。／センターで手芸にはいっている。

（四年　女）

熱心で面白い先生のおかげもあって、生物は好きな科目であった。小さな畑を作ったり、野山で遊ぶ生活体験とも関連があって興味があった。そんな私の目には今の教科書は難しそうに思える。ハイテクの時代だからそれは当然なのかも知れないが、生徒達はどれほどの親しみを持って学んでいるのだろうかと、疑問も出てくる。

難しい教科書とは別に、理科クラブの研究発表をみると、たいへん親近感のもてるものが多くてほっとする。生徒の生活感覚、地域の自然に根ざして、しかも新鮮な切り口からの問題の迫り方に感心する。

「蛙はどのくらい水に潜っていられるのだろう」と、ストップウォッチ片手に渓流で三〇分、四〇分と水のなかの蛙とにらめっこしている生徒の姿を思うと、笑いと同時に感動してしまう。

アカデミックな科学の勉強と理科クラブの生徒たちの心の間に、どのような距離があるのだろうと素人は考える。同僚の理科担当の人に尋ねてみたら、アカデミックな学習は受験のための道具にしかならない場合もあるし、身近な自然や環境の一つのテーマに結びつくこともある、逆に身近な素朴なテーマへのこだわりがアカデミックな関心に広がることもあるという。なるほど、教師の仕事の面白さも難しさもこんなところにあるのかも知れないと、改めて考えさせられた。

（なす　こうめい＝長岡大手高等学校）

◇さんせい

先生におこられないし、たくさんあそべるから。友だちとつりにいって、べんきょうやらないであそんで、テレビみて、パソコンのゲームをやる。／家でたくさんべんきょうやらされるかもしれない。／おじいちゃんのおみまいにいったり、べんきょうしたり、あそんだりしている。

（三年　女）

◇はんたい

学校はたのしくておもしろいから。あと、ともだちとすごくあそべるから。／スーパーファミコンをゆっくりやりたい。／こまをしたいから。おとうさんとあそびたい。／ともだちがかぜをひくから。

（一年　男）

◇さんせい

やすんで、どか（どこかへ）いきたい。ともだちといっぱいあそびたい。おとうさんとげえむをしたい。／ともだちとこうえんにいったり、げえむをする。／おかあさんとおとうさんといもうともやすんで、どか（どこかへ）いきたい。

（一年　女）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

※学校五日制賛成94、反対11。賛成の理由一位は「友だちと思いっきり遊べる」、反対は「勉強が遅れる」など。

（※『赤旗』日曜版（1992.3.8）による。武蔵野市など３つの学童保育で取材）